



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization



World
Heritage
Convention



モザンビーク島
サン・セバスティアン砦
再生への歩み



República de Moçambique

モザンビーク島

サン・セバスティアン砦

再生への歩み

編集担当 ラザール・エルンドゥ・アソモ、ヤナ・ヴァイド
(世界遺産センター)





サン・セバスティアン砦全景

1991年、モザンビーク政府が提出した推薦書によってモザンビーク島がユネスコの世界遺産リストに登録されたとき、島の豊かな文化遺産の恵みを世界中の人々と共有したいという島民の切実な願いがひとつ満たされました。

この島民たちの熱い思いは、やがて我々政府の計画した「モザンビーク再生および持続的発展のための統合事業」の実施を経て、強い責任感へと成長したのです。

この統合事業のもとに計画された50ものプロジェクトの中で、サン・セバスティアン砦の再生事業は遺産自体の歴史的価値と壮大さ、さらには観光産業をはじめとする他分野への波及効果が大きいと期待できる戦略的事業として位置づけられました。そして、実際に島民の生活改善や公共施設の質を高めるのに大いに貢献したのです。

ですから、私たちモザンビーク政府は、サン・セバスティアン砦再生事業第一フェーズにおいて様々なパートナーの皆様(日本、ポルトガル(IPAD)、UCCLA、オランダ、ベルギー・フランドール政府、ユネスコ)から頂戴したかけがえのないご支援に対し、その深い意義と重要性を心に刻んでいます。

第一フェーズの再生事業では、砦の構造補強を実施しました。私たちは、この事業が成功のうちに終わり、将来この建造物を社会に還元できる素晴らしい公共施設として再活用したいという我々の夢の実現を後押しする素晴らしいものとなったことを大変誇りに思っています。

そのようなわけで、地域住民の協力のもと、私たちは修復が完了したこの砦の再活用方法を既に決定し、第二フェーズでその実現をはかっていく所存です。

とはいうものの、すべてはこれまで様々な形で作業に参加し、私たちがここからその支援に感謝しているパートナーの皆様との共同作業をいかに持続していくかということにかかっています。

クラウディア・ハーベイ

国際連合教育科学文化機関(ユネスコ) マプト事務所 所長

かつて様々な文化の交差点であったモザンビーク島。その限られた狭い土地はつねに開発という課題に直面しているものの、そこに暮らす人々にとってはふるさとであり、そしてまた、過去の栄華のあとを残す島です。ここには、人を惹きつける魅力があります。

さきごろ、国連はモザンビーク政府やパートナーとの協力をはかりつつ、近い将来実施される開発事業の結果を詳細に追跡調査できるような小面積ながらも複合的な地理的特徴をもつ場の候補としてモザンビーク島をあげ、この島がもつ可能性について調査を行いました。この調査を通じ国連は、この冊子で紹介するサン・セバスティアン砦再生事業のような目に見える成果を生み出している包括的人間開発にかかわる取り組みの可能性をこの島に見いだしたのです。

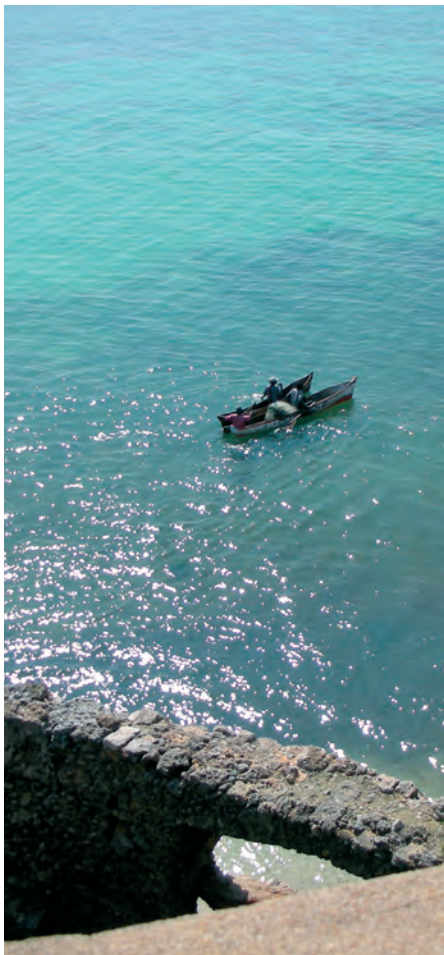
現在、国連配下の諸機関による機関内委員会は、過去の歴史を保存するという大前提のもとで地域住民の生活改善を図る様々な事業の可能性を検証しているところです。これらの事業は、地域住民全員が読み書きできるようになることや、ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトを通じた女性や若者の権利獲得、さらには無形遺産に携わる芸術家や技能保持者に働きかけることによって島での生産活動の可能性を高めようとする試みなどモザンビーク政府が掲げる諸目標の達成を支援しています。

モザンビーク島での活動は、地域社会と国が一体となってリーダーシップを発揮し、パートナーの支援を受けながら人間の潜在能力の実現や合意された国際目標に取り組む‘Delivering as One(一貫性を持った支援)’と呼ばれる国連諸機関が連携して取り組む新たな試みのパイロットケースとして貴重な事例です。それが、世界遺産であるモザンビーク島のもつ魅力であり、希望なのです。

正面入り口上部にあるベランダ



はじめに



山本忠通

ユネスコ日本政府代表部 特命全権大使

モザンビーク島のサン・セバスティアン砦再生事業における第一期事業が成功のうちに終わったことを大変嬉しく思います。この第一期事業は、島がたどってきた歴史を証する砦の保存のため、2003年に日本政府が拠出する世界文化遺産保護のためのユネスコ文化遺産保存日本信託基金によって開始されたものです。当信託基金によるサハラ砂漠以南のアフリカでは2件目の事例であり、近年他の援助機関による資金援助が引き続き行われている中でこの砦に対する国際的な関心が高まっていることを喜ばしく思います。このような様々な援助国による国際協力が行われていることから、この砦がモザンビーク国民、ひいては全人類にとって重要な遺産であることがわかります。私たちは、日本の信託基金事業がモザンビーク島の価値を世に知らしめるための重要な推進力となれたことを光栄に思います。また、このかけがえのない世界遺産保護に向けて、今後とも国際社会のより積極的な参加を期待します。

ミゲル・アナコヘタ・コヘイア

UCCLA/ポルトガル語諸国共同体 事務局長

UCCLAは、モザンビーク島とその周辺地域におけるサン・セバスティアン砦の文化的な価値を評価し、この島が経済の起爆剤として潜在的な力を持っていることを確信して、砦の修復にかかわるユネスコ事業、とりわけ地元や周辺地域を守ることを目指した砦の再活用事業に取り組んできました。モザンビーク島は1822年までモザンビーク国の首都であり、18世紀まではアフリカ東海岸の貿易中継地として不動の地位を占めていました。そのため、この地は数世紀にわたってアフリカ、アラブ、そしてヨーロッパの文化が融合する文化のつぼだったのです。このような背景から、モザンビークの旧首都であるモザンビーク島は1994年にUCCLAのメンバー都市となり、その中で与えられた使命としてグローバル化する世界の中でポルトガル語圏独自の文化やアイデンティティを世に知らしめるとともに、世界の文化多様性をより豊かにして生かすための貢献、そこに住む人々の生活改善のために取り組んでいます。



マヌエル・コヘイア

IPAD(ポルトガル援助開発機構) 総裁

ポルトガルは、数年前からユネスコとパートナーシップ契約を交わしており、この中には、アフリカのポルトガル語圏諸国で実施される事業の支援を目的とした信託基金も含まれています。こうした背景から、ポルトガル政府は、IPADを通じて世界遺産であるモザンビーク島のサン・セバスティアン砦再生事業に支援者として参加できたことを大変喜ばしく思います。ほんの一ヶ月前までは、砦の至る所に劣化箇所が見られましたが、地元の人々の積極的な修復作業への参加により、構造補強と表面のクリーニングおよび防水加工処理を完成させることができました。私たちは、参加した地元の人々のはたらきを高く評価し、改めて感謝の意を表します。

ポルトガルは今後も当事業に参加する予定です。このことは、すでにすばらしい成果を収めたインド洋沿岸における旧ポルトガル領最古の砦での修復事業に続くものとして重要だと考えています。そのために、ポルトガル政府は、2011年完成を目標に現在進めている砦再生事業への国際社会の更なる資金援助協力を呼びかけています。

バールント・テル=ハル

ユネスコ・オランダ政府代表部 特命全権大使

オランダ政府を代表して、この事業が意欲的かつ成功のうちに行われたことを、心から喜んでいます。オランダ政府はこれまで直近のパートナーとしてモザンビーク島で行われてきた再生事業に関わってきました。そもそも、この島とオランダには歴史的なつながりがあります。1602年にオランダ東インド会社が設立されたのち、オランダは1604年から1608年にかけて、この島を港として占領するために3回もの攻撃を行いました。しかし、そのたびにこのサン・セバスティアン砦に備えられた400もの砲台の反撃にあつたのです。さて、今日における私たちの砦に対する貢献は、例えば、遺産保全や海洋にかかわる研究所としての活用、観光地としての活用など、北モザンビークの経済発展拠点としての建物の将来的活用を視野に入れて行われた構造物の安定化作業だけにとどまりません。この修復事業に関わるにあたって、オランダ政府は、モザンビーク政府とユネスコと共同で、この地の浄水システムと貯水槽の再生を行う方針を固めました。この事業は、砦の将来的な活用と、砦を今日に至るまで水資源として利用している地域住民の必要に応えるという二つの目的に対応したものです。私は、ここまでの事業の進捗と、この事業のもつ大きな可能性に感銘を受けています。

ニック・ヴァンデルマルリール

在仏ベルギー・フランドル政府 代表

ベルギー・フランドル政府は、モザンビーク島での大規模な協力事業に加え、政府のもつ信託基金事業を通じてさらにモザンビーク島の保存状態改善のための協力事業を行ってきました。サン・セバスティアン砦再生事業は、モザンビーク島の世界遺産としての価値を保全するために大変重要な役割を果たしています。この4か国にまたがる多国間協力の支援枠組みに沿って、フランドル政府信託基金は島が直面する緊急かつ複合的なニーズに効果的に応えるという事業の目標を支援しています。具体的な活動としては、保存状態の詳細調査、5年間の管理計画策定、砦の保存と地域住民のための貯水槽の新設、さらには、修復事業のドキュメンタリー・フィルム撮影を挙げるすることができます。フランドル政府は、こうした一連の事業が、世界遺産の保全と持続的発展、ならびに島住民の生活改善に貢献することを願っています。

砦内部南面の外観



世界遺産 モザンビーク島

フランチェスコ・パンダリン

ユネスコ世界遺産センター 所長

周囲を砦に囲まれたモザンビーク島は、現在のモザンビークの首都マプトから北に2000km離れたところに位置し、かつてインド洋交易上重要な役割を担っていました。そこには、アジアとアフリカを結ぶ海上貿易の中心都市だったという輝かしい歴史を見つめてきた遺産が今も残されています。実際この島は、世界遺産であるザンジバルのストーンタウン(タンザニア)や古都ラム(ケニア)といった東アフリカに隣接する都市と共に、かつての交易都市群の一部を成しています。そんなモザンビークの歴史は、時の経済勢力による数々の侵略と征服の戦いに象徴されていますが、同時にその中であって、活発に行き交う国際交易のもと、文化の交差点として華開いたのです。実際、島の最も印象的な特徴は、医療施設や美術館、学校、教会、貯水槽などを含む当時としては先進的な施設を備えた独特な都市の姿だと言えるでしょう。このことは、アラブ民族、スワヒリ族、パンツ族、ポルトガル人、中国人、トルコ人、インド人、フランス人、また、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒、イスラム教徒など、様々な民族的、宗教的、文化的背景を持つ地域住民や旅人が、数世紀にわたってこの都市空間の中にそれぞれのもつ文化を刻み続けてきた結果といえる多様な文化的特性からも見て取ることができます。

この島は、8世紀頃から貿易拠点として利用されていましたが、本格的な都市開発が始まったのは、1498年にポルトガル人探検家のヴァスコ・ダ・ガマがこの地に上陸してこの地をポルトガル領と宣言した後のことでした。都市のインフラは、彼が連れてきたポルトガル人技師たちの緻密な技術によって開発され、今も16世紀当時のまま残る緻密な貯水システムに支えられて発展したのです。その後、島での交易がさかんになり、1763年には村と呼べるほどの規模に、そして1818年には都市と呼べるほどの規模にまで発展しました。その間、当初は香辛料や象牙を中心とした国際貿易が発展しましたが、19世紀からは次第に恥ずべき奴隷貿易が交易の中心となっていきました。また、島は開発当初よりポルトガル植民地の首都として機能していましたが、1898年、海上交易の衰退と共にマプトに首都機能が移されました。20世紀における特筆すべき出来事といえば、1975年にモザンビークがポルトガルから独立したことです。しかし、その後16年に及ぶ内戦が勃発し、人口問題をはじめとした今日まで残る諸課題を生み出すことになりました。

現在、モザンビーク島の都市としての基礎構造や建造物からは、驚くほどよくその発展の経緯を知ることができます。特に、北の「ストーンタウン」に位置する初期のポルトガル様式の建造物群と、南に位置するスワヒリ族やアラブ族の影響が融合した土着の建造物が連なる「マクティタウン」との間の違いは非常に印象的です。その違いは、植民地都市のストーンタウンがマクティタウンにあった採石場から得られた石によってできたという事実によってもたらされた2つの地区の様々なレベルからも強調されています。このような都市空間構造は、明らかにこの都市の歴史と植民地主義のもつ批判的側面を物語っています。

1991年、モザンビーク島はユネスコの世界遺産リストに登録されました。登録にあたっての評価基準は(iv)と(vi)で、「その土地古来の伝統とポルトガルの影響、更にはわずかながらインドやアラブの影響も加わり、これら全体の影響が渾然一体となって形作られた建築として極めて優れた例」であり、「インド亜大陸、ひいては全アジアと西欧とを結ぶポルトガル交易路の成立および発展を示す重要な証拠」である(推薦に当たってのICOMOS勧告より抜粋、1991年)という点が評価され、認められました。そして、モザンビーク島が世界遺産リストに登録されたわずか1年後に、モザンビークの内戦は終わりを告げ、平和が訪れたのです。

アフリカ全土において最も印象的な軍事施設ではないにしても、モザンビーク島で最も目をひく記念物をあげるとすれば、それは1558年から1620年にかけて建設されたサン・セバスティアン砦でしょう。まさに、この冊子で紹介している修復事業が行われた砦です。この砦は、当時のポルトガル領インド総督ドン・ジョアオン・デ・カストロの権限のもと、当時のポルトガル国王であったドン・ジョアオン三世の命によって建設され、その設計と構造は、イタリア・ルネッサンス期の軍事施設をもととしたヨーロッパの伝統を引き継いだものです。そして、歴史の中で建設本来の目的であった防衛精神を勇敢に伝え続けてきました。とはいうものの、修復作業中に行われた発掘作業では新たな発見があり、この建造物の歴史に関してまだまだ多くの謎が残されていることがわかりました。

軍事的な守り手としての意義は失ってしまったかもしれませんが、今の時代にあっては、これを文化遺産の守り手としてとて考えるのがよりふさわしいかもしれません。今回の再生事業の中で、伝統的な維持管理技術の復興が果たせたことは、間違いなくこの島全体の持続的な保全に大きな好影響を与えることでしょう。さらに、砦の修復事業の成功や砦の補強と新たな活用を目指した利用委託はユネスコの信念であり、希望です。すなわち、この事業は単に砦の建築的な価値や歴史的価値を未来の世代に受け継ぐというだけではなく、砦を島の経済にとっての起爆剤、そして島に残る建築遺産の更なる保護のため、また持続的な経済発展への触媒として開発してゆくことを目指すものなのです。

ユネスコの本事業が、5つもの援助団体から支援を受ける国際的な協力事業にまで成長したことは非常に素晴らしいことであり、大いに力づけられました。この国際的支援事業は、日本が撒いた一粒の種から始まりました。日本が事業を進めていく中で、ポルトガル語諸国共同体(UCCLA)やポルトガル援助開発機構(IPAD)が仲間に加わり、2008年にはベルギー・フランドール政府とオランダが加わりました。このような経緯から、この事業は過去50年に及ぶ世界各国の政府や民間組織の多大なる協力の下に進められてきた国際協力の大いなる歴史に名を残すことでしょう。ユネスコは、そのような意義ある事業に携わることができたことを誇りに思います。

ユネスコは、このような特筆すべき成果を現実のものとして下さった各援助団体の皆様に心から感謝の意を表します。また、今回の実り多き事業の成功に携わったすべてのパートナー、専門家、そして関係者の皆様に感謝いたします。特に、モザンビーク政府の方々への揺るぎない支援と助言、そして各種活動へのサポートがなければ、この事業は決して成功できなかったでしょう。ユネスコは、今後も、モザンビークの自然遺産、文化遺産の保全に向けて、協力関係いっそう強化していくことを期待しています。

最後に、ユネスコは、すべての援助団体ならび国際社会に対し、国・地域の社会や人類の発展のいしづえとなる遺産保護のための努力に向けて、一層のご支援をお願い申し上げます。



1957年に作成されたモザンビーク島の地図

ユネスコの再生事業 - 持続的な発展のための保全 -



ベランダ



屋根に設けられた水路



見張り塔

ブノワ・ソッスウ
ユネスコ・ヤウンデ事務所所長（前ユネスコ・マプト事務所所長）

モザンビーク島のサン・セバスティアン砦再生事業は、文化遺産の保存が持続的な発展や貧困対策として非常に大きな可能性を持っているという認識に基づいて行われています。実際、文化の持つ価値というのは、地域社会の社会的、経済的、そして環境的な要素に対してそれぞれ同時に働きかけ、相互理解、社会的結合、また平和を支持する思想や習慣を創造するという優れた特徴もっています。文化が発展の推進役を担うという考え方への認識は、ここ10年の間に急速に高まっており、そのことは、近年整備されたいくつかの条約からもわかります。その代表ともいえるのが、世界遺産条約(1972年採択)を補う形で近年相次いで採択された、水中文化遺産保護条約(2001年)、無形文化遺産保護条約(2003年)、そして文化的表現の多様性の保護と促進に関する条約(文化多様性条約、2005年)という3つの条約です。さらに、統計資料が示すところによると、文化に関連する分野での経済力は世界的に高まっているという傾向があり、そもそも文化的価値というものは、その文化の生まれた土地と切っても切り離せない関係にあることから、発展途上国にとっては発展のための大切な機会となりうるかと理解されています。

そこで、ユネスコとそのパートナーたちは、モザンビーク北部地域が1992年に勃発した内戦以来直面する開発上のもっとも核心的な課題を打破する手段として、文化遺産の再生事業が最もふさわしく先見性のあるものだと考えました。

再生事業は、すでに島においてめざましい効果をあげています。ここでは、何よりも地域社会における雇用の創出が最大の重要事項でした。そのため、約100人の地域住民が実際の修復作業や事前に行われた技術アセスメント調査に従事できるようにし、作業の中で専門的なトレーニングを受けることとなりました。また、伝統的な建築技術や手法、材料の調達を通じて、地元の職人や芸術家の地位と技術の向上にもよい結果

をもたらすことができました。更に、参加者の意識を高めるとともに、オーナーシップの向上を目的とした定例の運営委員会には、地元の関係者やパートナーも参加し、建造物の再利用や島全体の保全と管理に関する問題と関連のある話題について活発な意見交換が行われました。そして、島の地域住民の生活環境において、最も直接的かつ物理的な改善点は、なんとといっても砦の集水システムの修復と、新たな公共用貯水槽の設置でした。修復された砦は、将来島の経済を開花させ、住民の生活向上に役立つことでしょう。この事業は、島の住民たちに対して、砦の伝統的な利用を尊重しつつ、確実に明るい未来へ向けて砦が今日担うべき機能について自らが考え、開発の方向性について決断していく場を提供したのです。新たに期待される砦の活用方法の一例としては、国内外の大学と連携した文化遺産保全に関する研究所として用いることなどが計画されています。

最後にユネスコは、サン・セバスティアン砦が世界遺産であるという条件を最大に生かしつつ、砦の単なる技術的修復という次元を超えた前向きな効果を的確にとらえた上で、その保存にかかわる国際的活動の立ち上げに中心的な役割を果たしたモザンビーク政府に深い感謝の意を表します。この事業によって得られた成果は、モザンビーク島とその周辺にもたらされた経済発展という観点から評価されるべきでしょう。今日、いくつもの統合的な国際事業が、モザンビーク政府が行う島の都市環境改善ならびに島民の生活環境改善への取り組みを支援しています。この中で最も重要なプロジェクトの一つが、ミレニウム・ヴィレッジプロジェクトと呼ばれるもので、地域社会と国連の各機関がパートナーシップを結び、モザンビークにおける文化面と創作活動にかかわる産業、そして住民参加による施策を強化すると同時に、モザンビーク島の管理計画と統合的な開発計画を策定することを目標としています。これからもわたしたちはこの希望の道を歩み、モザンビーク島とその住民たちの持続的な発展のために協力していきましょう！



島とそこに暮らす人々

モザンビーク島の概要

島全体に都市がひろがるモザンビーク島は、その国モザンビークの名前の由来となった島です。この島は、数世紀にわたってインド洋の航海ルートにその名が記されており、インド亜大陸、ひいては全アジアと西欧とを結ぶポルトガル交易路の成立および発展を示す重要な証しを残しています。

島は、砂浜によって区切られた珊瑚礁にあり、アフリカ本土に入り込んだ湾と外海を分けるような場所に位置しています。環礁に守られた静かな海に囲まれ、また本土からは西にわずか4kmのところ position していることから、帆船にとっては天然の良港として機能してきました。湾へと向かう狭い潮路は、当時サン・セバスティアン砦とサン・ロレンソ砦によって常に監視され、守られていました。今日でもこの湾は、砦の中に残されている農地や市場、モスク、教会などを所有する小さな村々の住民たちが船で行き来するために利用されています。

現在の島の人口の多くは、西暦200年頃に島にやってきたバンツ族の子孫です。その後、8世紀から16世紀にかけてアラブの交易地として機能していた時代に、イスラーム文化が島へもたらされました。その影響は今も現地語として使われているナハルサ語に色濃く残されています。その後、16世紀から17世紀にかけてポルトガル人が入植し、それに続く2世紀はインドの交易勢力が優勢となり、その後は奴隷貿易の拠点として利用されるようになりました。こうして、島は様々な文化が融合する紛れもない文化のるつぼとなったのです。そして、1975年、モザンビークが独立を果たした際に、この島も新しい独立国の中でその地位を獲得しました。

島は、長さ3km、幅200m～300mの細長い形状をしており、現在は、本土のサンクロールンボと橋で結ばれるようになりました。このうち、居住区の面積はおおよそ1平方キロメートル、その中に約15,000の人々が暮らしています。

島の居住区には、大きく分けて2つの地区があります。

石と石灰の町、「ストーンタウン」と呼ばれる地区は、島の北端おおよそ7分の3に当たる面積に広がっています。ここは、最初にポルトガルの植民地政府(1507-1898)が置かれたところです。ここには、当時の行政を司った建物や、商業施設、倉庫、歴史的な記念碑などが見られ、いまだに19世紀から変わらずに残されてきたと思えるほどよく建造当時の構造や材料の特徴を備えた住宅もみられます。この地区の境界には、医療施設とその庭園が位置しています。

一方、マクティと呼ばれる葦葺き屋根の住居から名付けられた「マクティタウン」は、1868年、医療施設よりも南にしか葦葺き屋根の住居を建ててはいけなかったという布告が出された後に成立した地区です。この命令は、もともとポルトガル人が入植する以前から島に住んでいた人々にとって、彼らの生活がその伝統的な住居とともに島南部の旧石切場へ押しやられてしまうことを意味していました。現在、マクティ地区には島全体の住民の約7分の2が居住しており、地域の経済は活性化しつつあります。

この2つの地区以外には、島の北部、サン・セバスティアン砦の隣に位置するサン・ガブリエルと呼ばれる草地、そして最南端に墓地があります。

この島では地下水を得ることができないため、生活用水は、島へ人々が移住してきた頃から住居の平らな屋根の上に降り注ぐ雨水を集めることによりまかなわれてきました。そのため、島のほとんどの建造物に共通した特徴的な建築様式が生まれることになり、単純な構造をしたマクティと呼ばれる葦葺き民家から、ストーンタウンの大規模商業施設まで、同じような特徴を備えるようになりました。

島民のほとんどは漁業によって生計を立てていますが、本土で農業や家内工業生産を行っている人々や、地元での塩の生産・先物取引のような商売を行っている人々もいます。近年、島と本土を結ぶ橋が改修されたことにより、経済や社会的流動性の向上が期待されています。

しかし、この一世紀以上にわたり、島はまさにその経済的・政治的な重要性を徐々に失っていきました。元々この地は1507年よりポルトガル植民地政府の首都が置かれた場所でしたが、1898年にその管轄権限がポルトガル植民地領モザンビークという新しい組織に移譲された際に、首都機能もマプトに移されました。しかし、この変化そのものは島の生活に大きな変化をもたらしたわけではありません。アフリカ本土の内陸部が交易のために一斉に開発され、内地の商人が富を築いたことや、1869年のスエズ運河の開発などが、モザンビーク島が深く関わってきた外洋貿易に打撃を与えたのです。

1935年には、島はとうとうニアッサ州の州都の地位もナンブラへ譲り渡してしまい、1951年にナカラ港が開港してからは、商業的な地位はおろか、航海上の活動も終焉を迎えたのです。

その後1960年代には、島の経済は観光産業の振興によりわずかながら回復しました。この時期、ポルトガル人たちは、現在博物館として利用されている旧総督

邸宅をはじめとする数多くの宗教施設や行政・軍事施設を、見栄えよく観光客を魅了するような施設となるよう表面的な修復を施したにすぎませんでした。

やがて、1975年にモザンビークが独立を果たすと、多くのポルトガル人や彼らの子孫はモザンビーク島や国そのものを離れていきました。後に残された建物には、昔からの住民が居住するようになりました。貧しい人々の中には、島の別の場所で自分たちの家を作るために、この地区の家から梁や床材、扉、窓といった建材を持ち去り、活用した人々もいました。

1975年の独立後にこの島を保全しようとしたモザンビーク政府の努力もむなしく、その後始まった内戦が初期の保全事業を中止に追い込み、島への投資もその効果が弱められてしまいました。

1980年代後半から1990年代前半にかけての経済の停滞を引き起こした要因は様々ですが、決定打となったのはこの内戦で、島のほぼ自給自足に近い経済に大きな打撃を与え、ついにはその物理的、経済的秩序の基盤を破壊してしまいました。内戦中には、数多くの避難民が島に押し寄せ、人口過多や貧困層の増加といった問題に追い打ちをかけました。しかし、和平合意が

行われた後、ほとんどの避難民は再び本土へ戻っていきました。

いかに島が海に囲まれて守られていたとしても、島は毎年おそってくるサイクロンの被害を受けてしまいます。2008年のサイクロンによって、サン・セバスティアン砦が大きな被害を受けた際、ユネスコは世界遺産条約に基づいて、緊急の国際援助を行いました。

長年にわたる独立運動と内戦からの復興の道半ばにある国全体の状況と同様に、島の経済基盤はいまだに不安定ですが、国際的な状況からみれば、社会的・経済的発展および改善ははっきりとした形で現れつつあります。世界遺産のモザンビーク島は、文化遺産の保存活動と同時に国内のみならず国際的な観光地として成長することによって、住民たちの生活環境改善をはかり、持続的発展の好例となるための道を歩んでいるところです。



「コーディチェ・イルミナード 139(1639)」に描かれたモザンビーク島の古地図

サン・セバスティアン砦

サン・セバスティアン砦の建設は、1545年から1547年の間にポルトガル領インドの総督を務めたドン・ジョアオン・デ・カステロの命により進められました。もともとこの地にはサン・ガブリエル砦が建設されていたのですが、この砦は小型で旧式であったため、当時モザンビーク島の近隣に位置していたスワヒリ王国やトルコ軍の砲術に対して全く無力であり、攻撃にさらされる危険性が迫っていました。大航海時代が幕をあげ、世界航路開拓による交易が劇的に発展する中、ポルトガルがこの地で築き上げてきた地位を堅持し、激動する世界貿易の潮流の中で勝利を収め続けるためにも、この地には重厚で相手を威嚇できるような造りの砦が求められたのです。こうして、旧式の砦に取って代わる新しい砦が計画され、その設計には、ポルトガル人の軍事建築家ミゲル・デ・アフダ（～1563）が任命されました。

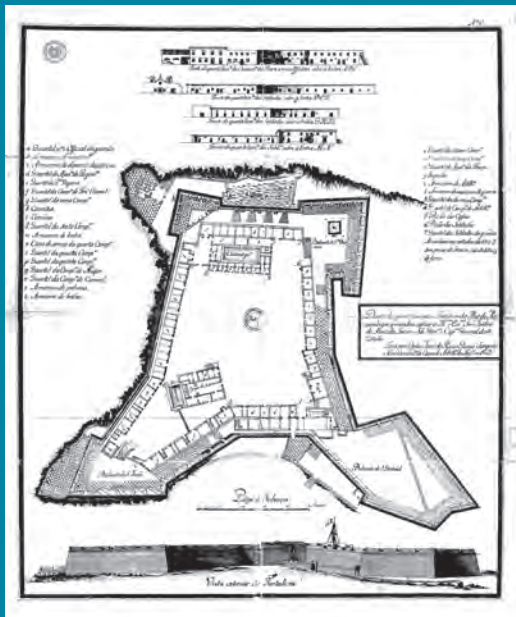
建設工事は、熟練工不足などから難航しました。1558年によくゴアからの熟練石工や奴隷、地元住民を動員して、この巨大な冒険的事業が開始され、最初の駐留軍が駐屯できるようになったのは1583年のことです。建設当初の定員は、兵士と植民地政府あわせて30人ほどと想定されていましたが、実際の駐屯者数は19世紀の終わりまで増え続け、最後には様々な組織からあわせて数百もの兵士が駐屯するようになりました。また、建物の一部は1975年まで牢獄としても使われていました。

サン・セバスティアン砦は、大切な大砲や弾薬の武器庫を防御し、敵に反撃を加えるための軍事施設としてすばらしい機能を発揮しました。また、危険が迫ったときには島民たちのシェルターとしても使われました。例えば、1607年にオランダが侵攻し、3ヶ月にわたって島を包囲した時にも、巧みに設計された屋根勾配を利用して屋根に落ちる雨水を集める仕組みのおかげで、島民たちは抵抗を続けることができたのです。島の貯水槽はまた、貿易船に積み込む飲料水を補給するためにも使われました。

ドミニコ会の修道士であったジョアオン・ドス・サントス（1622年ゴアにて死去）によって、16世紀におけるモザンビーク紀行文が書かれた有名な「エチオピア・オリエンタル」という書物には、当時の砦の様子が記されています。この中で彼が書き記した構造が今も残されていることから、この砦が当時からほとんど変わっていないことが伺えます。特にノサ・セニョラ・デ・バルアルテ礼拝堂（要塞の貴婦人）という小さな礼拝堂は、南半球最古のポルトガル建築と考えられており、念入りに細工されたアーチ道は、マヌエル様式の顕著な例だとされています。

「この島の先端、砂丘の入り口に砦がそびえ立っている。そこには、ポルトガルの兵士に守られたキャプテンが住んでおり、昼夜問わず砦を見張っている。日中は砦の門を、夜間は城壁の上を。4つある強固な稜堡のうち2つは海に向かっており、残る2つは島を向いている。そして、両岸に海が迫る部分には、数え切れないほどの力強く美しい大砲が並んでいる。…中略…砦の中には、80万リットルもの雨水をためることのできる貯水槽があり、雨水は屋根や壁からパイプを通じて集められる。また、砦の中には弾薬庫や、砦を防御するために必要なものが揃っており、米やトウモロコシといった食料まで備蓄されている。…中略…砦の敷地中央には新しい教会が建設されている最中で、完成したあかつきには島のために仕えることになるのだろう。この砦は、インド洋沿岸でもっとも強固な砦の一つだ。砦の外側の海に面した部分には、ノサ・セニョラ・デ・バルアルテ礼拝堂がたたずんでいる。この礼拝堂は、サン・セバスティアン砦が建てられる以前に稜堡として使われた建物を引き継いでいるので、稜堡に建てられた礼拝堂という意味を込めてこの名が付けられた。」

出典：ルイス・フィリペ・ベレイラ著 「サン・セバスティアン砦」（2003）、ユネスコ、パリ より抜粋



カルロス・ジョゼ・ドス・レイゼガマによって1802年に作成された砦の地図



城壁からの植物の除去



珊瑚石の屋根板で葺かれた屋根の再建と防水処理





二階部分の平面図

サン・セバスティアン砦修復事業 — 修復方針と施工計画の策定、その実施内容と成果 —

ジョゼ・フォルジャズ

(ジョゼ・フォルジャズ建築事務所、建築コンサルタント、修復事業統括者)

モザンビーク島のサン・セバスティアン砦修復事業にかかる国際コンペは、私の建築コンサルタントとしてのキャリアの中で、非常に重要でかつ意義あるできごとでした。それは、このコンペが、高い技術をもった多くの国際的な専門家と共に競う場を提供してくれたからということもありますが、なによりも、モザンビーク島に魅せられ、長年にわたって島の問題にかかわってきたすべてのモザンビーク人建築家にとって、この砦は思い入れのある象徴的価値をもつものだからです。

この調査事業は、砦の歴史や技術的特徴に関する更なる研究を進める上で、とても貴重な体験でした。なぜなら、何世代にもわたるアフリカとヨーロッパの技術者たちの仕事と芸術によってこの人類の挑戦ともいえる砦の建設が可能となったことを身近に意識しながら、砦の歴史や技術的特徴に関する更なる調査研究を進めることができたからです。初期に行われた修復作業のほとんどは、砦の維持管理にかかわる施工で、主に構造劣化の進行を食い止めるための措置でした。しかし、砦がかつて担っていた防御施設としての役割を終えた今、次の修復では、この豊かな歴史的遺産が単なる博物館行きの記念物となってしまうまいよう、砦になんらかの新たな役割を持たせるべきであるという結論に達しました。

そのため、今後実施される修復事業やその後の新たな活用の方向性の中で、現在この砦が担っている重要な役割の一つ、すなわち島民の生活に直結する雨水集水施設としての機能を損なわないということが必須要件となりました。

この要件を満たすため、今回の修復事業では、砦にもともと備わっている雨水集水システムを完全に修復・改修し、そこから集められた雨水を貯水するための新たな貯水槽を砦の外に新設するという計画を提案しました。こうすることによって、砦の歴史的な特徴を最大に生かしつつ、同時に地域社会の生活改善にも寄与することができます。事前調査は、砦の将来の適切な活用にとまなう諸機能を設置するにあたって実施すべき必要項目を網羅していますが、残念ながら予算上の制約のため、砦の構造すべてを完全に回復させるには至りませんでした。ただ1カ所において、建物本来の構造や空間を変更する提案を行いました。砦の床が崩壊してぶら下がった状態になっていた箇所をそのまま

生かして2階建て構造とし、ここを今回の修復事業が行われたことを記念する特別な多目的空間とすることにしました。

処置方針

砦の修復のために実施すべき処置の洗い出しと見積もりのために行われた調査および詳細分析の結果、以下のような処置方針が導き出されました。

・砦は、建造以来、特に20世紀初頭から中頃にかけて数多くの改修の手が加えられており、その実態は公文書館に保管されている文書や他の資料から確認することができる。

・過去に行われた改修内容のほとんどは、空間を仕切るための追加の壁の設置などであり、建築当初の想定以外の使用目的に対応するための改築であった。

・建造当初の屋根板は、木製の梁の上にセラミック製の瓦もしくは珊瑚石の板が敷き詰められ、更にもその上に珊瑚石のコンクリートが塗り込められていたが、現在、そのほとんどは鉄筋コンクリートに取り替えられている。それでも、取り替えられた箇所が、配列や勾配という点で当初の状態を踏襲しているのは、おそらく残された木製の梁がその配列と勾配を決める型枠としての役割を果たしたからだと推測される。この木製の梁のほとんどは、もはや構造上はその機能を果たしていないものの、そのままの場所に残されている。

・鉄筋コンクリート製の屋根板のほとんどは、一見すると雨風によってひどく劣化しているように見えるが、実際には理にかなった安定状態にあり、解体などの大規模な措置をとらずに修復できる。

・屋根に残された木製の梁は構造的にはもはや機能しておらず、当初そこに残された理由としては、軍の建築技師が建造当時の手法による結果を後世に残すために敢えて残したものと解釈されていた。しかし、我々建築家はこの考え方を改め、梁を撤去することにした。こうして撤去された構造上余分な木材は、設計当時の建築技法に基づいて復元される予定の箇所再利用することにした。この再利用により、復元に必要な部材のほとんどをまかなうことができた。

・鉄筋コンクリートの屋根板に発見された劣化部分の劣化原因のほとんどは、雨水集水システムの不備による雨水の浸透が原因であった。このため、一部の屋根板については、劣化箇所を切り取り、周辺の古い部材と新部材をつなぎ合わせるための適切な措置を行った上で新しい部材と取り替える必要があった。



上空から見た砦

・建造物の構造的完全性を保つという、この修復事業の本フェーズの目的でもあるこの作業の戦略は、最初の契約段階で厳しい予算的制約に直面した。

こうして行われた砦の形状や配列、技術などの建築学的な特徴、そして遺産周辺の環境に関する広範囲に及ぶ調査の結果、様々な構造と建造物の修復・再生には以下の要因が影響しうることが明らかとなりました。

砦は壊滅寸前の状態 おびただしい腐敗による被害は、建物の構造に影響を及ぼしているといよりはむしろ表面的な影響であり、改善策を講じることによっておおその問題は解決できることが判明しました。しかし、少なくとも砦の幾つかの箇所は壊滅寸前の状態に陥っていました。もっとも緊急に行うべき措置は建物の構造が崩壊してしまうのをすべて食い止めることでしたが、この成否は屋根の防水処理の進行状況に大きく依存していました。このような深刻な状況に陥ってしまった最大の原因は、過去40年あまりにわたって建物の維持管理がなされていなかったことにあります。

非常に厳しい環境条件 砦はとても厳しい環境条件にさらされています。砦は海の中から顔を出している珊瑚石の上に直接建設されており、ここにさらに、サイクロンや数ヶ月にわたる雨期の激しい雨と常に湿度の高い熱帯の気候が追い打ちをかけるように建物を襲います。このことによつて、壁や屋根の乾燥には非常に時間がかかります。

建築材料の特性上の問題 砦は全体が珊瑚石からできていますが、この石は外から侵入したアルカリ塩を大量に含んでおり、とても吸湿性が高い状態となっています。

雨漏りの問題 屋根板や胸壁にできたひび割れ、そして傷んだり不適切な状態の防水処置箇所から発生した雨漏りは、鉄筋コンクリート内のスチール鉄骨断面を腐食させたり多くの壁の下地の劣化を招き、その結果、建物の構造上の完全性に影響を及ぼすほどになっていました。

植物の繁茂 胸壁や屋根板に発生したひび割れのほとんど箇所、さらには雨どいや垂直にのびる排気口、窓枠などにすでに植物が繁茂しており、多くの建築的装飾を台無しにしていました。それだけでなく、植物が水路をふさいでしまうことが屋根や壁の主な劣化要因の一つになっていました。

すべての扉と窓の撤去 砦は、すべての扉と窓が撤去

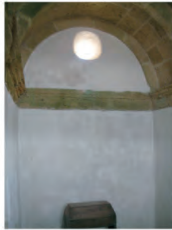
一階部分の平面図



THE SAN SEBASTIAN FORTRESS

REHABILITATION PROJECT • ISLAND OF MOZAMBIQUE • MOZAMBIQUE • MAY 2007

INTERIOR VIEWS • CHAPEL



www.joseforjazarquitectos.com • Av. 24 Julho, nº 67, Maputo, Moçambique • tel: 21 493016 • celular: 82 3018990 • fax: 21 493016 • joseforjazarquitectos@vncabo.co.mz

JOSÉ FORJAZ • ARQUITECTOS

THE SAN SEBASTIAN FORTRESS

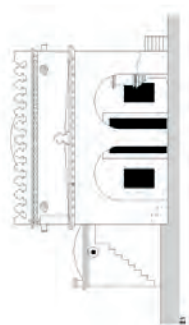
REHABILITATION PROJECT • ISLAND OF MOZAMBIQUE • MOZAMBIQUE • MAY 2007

PATHOLOGIES • CHAPEL



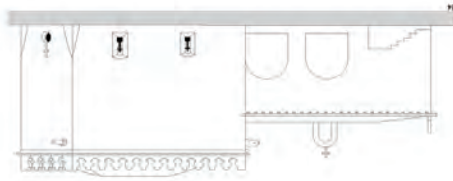
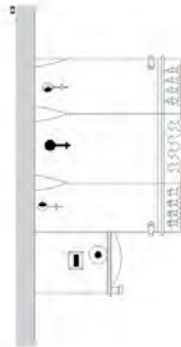
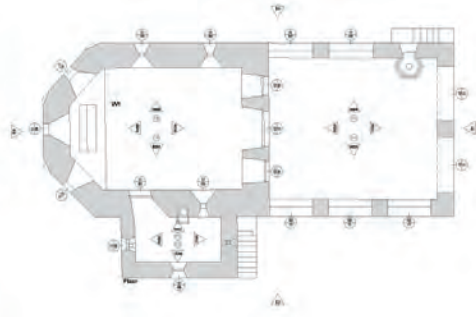
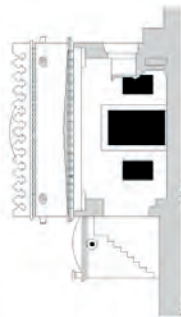
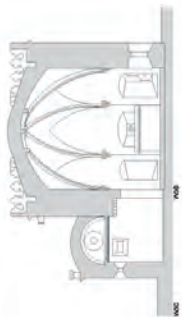
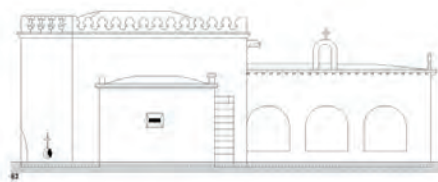
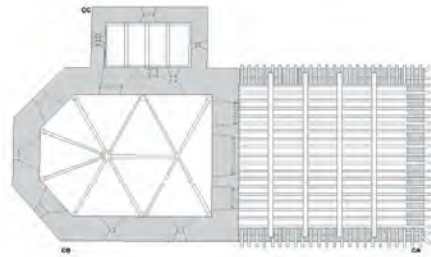
www.joseforjazarquitectos.com • Av. 24 Julho, nº 67, Maputo, Moçambique • tel: 21 493016 • celular: 82 3018990 • fax: 21 493016 • joseforjazarquitectos@vncabo.co.mz

JOSÉ FORJAZ • ARQUITECTOS





Element	Value	Unit
Level 0	100	
Level 1A	100	
Level 1B	200	
Level 2A	200	
Level 2B	200	
Level 3	200	
Level 4	200	
Level 5	200	
Level 6	200	
Level 7	200	
Level 8	200	
Level 9	200	
Level 10	200	
Level 11	200	
Level 12	200	
Level 13	200	
Level 14	200	
Level 15	200	
Level 16	200	
Level 17	200	
Level 18	200	
Level 19	200	
Level 20	200	
Level 21	200	
Level 22	200	
Level 23	200	
Level 24	200	
Level 25	200	
Level 26	200	
Level 27	200	
Level 28	200	
Level 29	200	
Level 30	200	
Level 31	200	
Level 32	200	
Level 33	200	
Level 34	200	
Level 35	200	
Level 36	200	
Level 37	200	
Level 38	200	
Level 39	200	
Level 40	200	
Level 41	200	
Level 42	200	
Level 43	200	
Level 44	200	
Level 45	200	
Level 46	200	
Level 47	200	
Level 48	200	
Level 49	200	
Level 50	200	



Scale: 1/100



岩に根付いた植物の除去と、北東塁道の舗装修復の様子



されていました。そのうちの何カ所かは、かつて砦が中学校として利用されていた際に仮設の扉が設置されていましたが、いずれにしてもこうしてできてしまった無防備な開口部から建物内に雨水が入り込んでしまい、木材によって支えられていた屋根構造の劣化を引き起こす大きな要因となっていました。

更なる劣化防止のための処置方針にかかる制約 更なる砦の劣化を食い止めるための処置方針は、以下のよう制約を受けていました。

- ・予算上の制約
- ・島への必要資材運搬上の制約。島と本土をつなぐ橋は、1トンという制限重量がある上に、こうした資材を簡単に積み卸しできるような船による交通手段がないこと。
- ・島内への廃材投棄が不可能であること。
- ・雨期。雨によって、しかるべき処置を行うのに厳しい時間的制約が生じたこと。
- ・地元出身の熟練職人や技術者を見つけることの難しさ。
- ・島が都市圏から遠く離れていること。

先に挙げたような様々な制約や条件、また事業の目的を考慮した上で、私たちは事業の目的を尊重し、歴史的建造物修復の一貫した理念を遵守することを盛り込んだ、確実な処置方針のためのガイドライン集を作成しました。

実施された主な処置

- ・繁茂していた植物とその根茎の徹底的除去。
- ・鉄筋コンクリートの様々な劣化箇所のうち、そのまま保存できると判断された可能な限りすべての箇所の処置と修復。
- ・保存不可能と判断された鉄筋コンクリート部分の切断除去と、新しい鉄筋コンクリートの流し込みによる取り替え。この措置を行った多くの箇所では、鉄筋コンクリートだけでなく、梁や屋根、床板、まぐさなどの取り替えも同時におこなった。
- ・危険な状態になっている建造当初の屋根や床板の撤去と伝統的材料による復元。
- ・雨水の浸透や、屋根板、壁の劣化進行を防ぐため、すべての屋根、胸壁ならびに必要と判断された箇所に対する防水処理の実施。
- ・歩行者の往来に対応できるよう、防水処理された壁面の保護処置。
- ・雨水が貯水槽や海へ速やかに流下できるよう、屋根と地上部分それぞれに設置された水路や雨どい、吐水口の清掃と必要箇所の取り替え。
- ・雨水の貯水槽の取り替えと防水処理、ならびに砦外部に新設された貯水槽へ浄水を供給するための水中ポンプの設置。
- ・島民の衛生環境を改善するため、砦内部にある既存の





新たに砦の外に設置された貯水槽には、修復された砦の集水システムによって集められた水が貯えられており、モザンビーク島の住民たちに真水を供給しています。

貯水槽からの浄水を貯水するための貯水槽を皆外部へ新設。

・既存の建物内への新たな公衆衛生施設の設置。この施設は下水処理システムとつながっており、安全な排水処理ができるようになっていく。

・電気の導入と分電盤の設置
・将来実施される復元処理にむけて、仕上げ処理方法の標準化や構造的処置の検証と実際にかかる費用試算を行うため、計画された特定部分での皆の完全な復元を実施(修復計画図中のH1表記部分)。

部分的な完全復元を行ったH1エリアは、管理事務所や、将来の修復事業の拠点を設置するのに理想的な場所です。また、観光客の入場口や受付場所として機能させることや、オリエンテーションと案内のための場所としても活用することができるでしょう。

修復作業のための資材調達

修復作業を円滑に進めるため、資材調達の際にはいくつかの点について特別の注意を払いました。例えば、石灰や木材を調達することは今回の建設作業の中で必須要件です。材料の不足という問題を回避するため、修復作業の中で不要となり撤去された木材をできる限り再利用することや、地元で生産される石灰をできる限り使うなどの工夫を行いました。

トレーニング

修復事業の国際コンペが実施されたのち、事業の運営と施工管理はモザンビーク国内の建築事務所に委託されることとなりました。彼らは、建築士や研修生として主にモザンビーク人を雇用し、さらに施工管理チームのアシスタントや調査補助のため、建築学部の子生たちを採用しました。

国際的な連携管理は、ポルトガルの国際的な建設会社のモザンビーク支社が担当することになりました。この会社は、熟練した地元の職人だけを雇い入れ、必要に応じて国際的に活躍する専門家から適宜サポートを受けられる体制を整えました。地元職人のうち数名は、ケニアの古都ラムで行われている石灰の調製や、石灰を用いた細工、しっくい仕上げの技術に特化した訓練にも参加しました。

この修復事業に伴う建設現場と施工会社は、100人をこえる職人たちに技術を身につけられる素晴らしい機会を提供したのです。

設計図や記録の整備

平面図や内部立面図、断面図、屋根伏図といった図面類は、すべて同一の書式で記述されました。立面図と断面図は平面図の周りに展開図として接合されており、屋根伏図は構造要素のすべてを表示しています。

また、それぞれの場所で、床、壁、天井の状態と、

その場所で最も深刻な被害状況について写真と共に2枚もののレポートが準備されました。

さらに、すべての箇所写真撮影調査を行い、訴訟などの際の証拠資料としてまとめられ、建築会社に提供されました。

こうしてそれぞれの場所に応じて念入りに準備された文書類は、床、壁、天井、ドア、窓、その他、といった建物の要素ごとに分類整理されています。それぞれの要素について、測量的資料と記述による説明資料に加え、それらに対応するコード化された破損状況一覧を参考資料として準備しました。

チームへの感謝

私たち建築家は、二人のフランス人修復専門家、ピエール・アンドレ・ラブロードとコレット・デ=マッテオに感謝の意を表します。二人は、私たちの申し出を快く引き受け、わざわざパリから合流し、修復作業のための一貫性のある修復方針立案において貴重な助言を与えてくれました。それと同時に、私たちは、モザンビーク人チームのヴィトール・トマシュ、ヨリック・ウデイエ、ジョルジ・シルバ、カルロス・シュヴァルパッハ、イザ・テレス、フィリペ・ブランキニョ、ブルーノ・ロベス、アントニオ・コラソ、ンドウガゼ・レベロ、マルコ・ロホ・リアオン、モハンマド・カッシモ、イザイアス・モタ・フェレイラ(ジーコ)、ムハマト・スヘル・アルビー、そしてタルママデ・アダムジー・タラママデ各氏についてもふれておかなければなりません。彼らの献身的な貢献とその能力があったからこそ、このような素晴らしい成果を得られたことをここに記し、感謝の意を表します。



(上) Ⅲエリアにある、主庭を見下ろす位置に設けられたベランダ



貯水槽の修復(上)と、北の要塞へと続くVantmure(下)



第二フェーズに向けての挑戦 –再活用に向けた再生事業–

この再生事業は、2つのフェーズに分けて立案されました。先だって行われた技術的なアセスメントと事前の準備作業に続き、第一フェーズでは、劣化の進行を食い止めるための緊急的な構造補強や修復作業、そして基本的な設備(電気、上水設備、公衆トイレの設置)の設置に重点が置かれました。これら第一フェーズの目的は、予算上の問題によりいくつかの未済項目がありますが、予定した大部分の作業を完成させることができました。

そして、これから行われる第二フェーズでは、再活用に向けた再生のための作業と砦の持続的な維持管理作業に重点がおかれています。

今後予定されている第二フェーズでの具体的な挑戦とは？

一つ目の挑戦は、第一フェーズで保留となっている幾つかの作業を引き続き実施することです。これには、構造的な作業や外壁の修復、さらには修景や照明に関する作業などが含まれています。また、近年の作業で明らかになった新事実から、現場での更なる歴史的、考古学的調査が必要となってきました。

二つ目に、2008年のサイクロンの被害を受けた、標高が低い位置にある堡塁の壁とそれを支える珊瑚石の基盤の緊急補修事業を速やかに実施する必要があります。世界遺産委員会は、モザンビーク政府が提出した緊急の国際支援要請を受け入れ、全費用の四分の一を負担することを決定しました。そのため、この事業に応じる基金を検討する必要があります。

三つ目に、これらの修復事業の成果を実り多くかつ持続的なものにするために、砦の魅力を引き出し、観光客の受け入れ体制を整えて、多くの観光客を誘致する必要があります。そのために、まずはビジター・センターや運営管理事務所を設置するところから始める予定です。

最後に、決して忘れてはならないこととして、砦の再活用方法の検討という大きな課題が残っており、このことについては、近い将来モザンビーク政府が答えを出すことになっています。修復が完成したサン・セバスティアン砦の運命は複雑な問題を伴っており、すべての関係者が密に意見交換をすることによって始めてその道筋を見つけることができるといえるでしょう。この遺産は、様々な目的に応じて容易に利用転換が図れるような広大な敷地を有しており、これまでも、博物館や公会堂、研究所、美術工芸の作業場、店舗、事務所、食堂やポルトガルの伝統的なボザータ方式のゲストハウスなど、幾つかの再利用の可能性について検討が進められてきました。これらの可能性は、いずれをとっても、砦のモザンビーク北部における主要観光地としての価値を高めることにつながるでしょう。また同時に、地域経済と住民にとって、持続的な収入源となるのです。こうした数々の可能性のうち、オランダ政府から2011年まで受ける予定である助成によって、ここに遺産保護を研修するための大学院が設置されることが検討されています。ただし、この事業を進めるためには、更なる基金の創出が必要です。

現在、住民参加方式によって入念に進められているモザンビーク島の管理計画策定は、住民とモザンビーク政府に対して、島が抱える核心的な課題を乗り越えるためのすばらしい機会を確実に提供しています。この活動を通じて、彼らのものであるこの遺産を最も適切に利用し、またそのために将来性のある再活用方法を見いだしていくことができるでしょう。

南壁に設けられた入り口(右)と、教会堂へと続く道(下)



地域社会の修復事業への取り組み

モハンマッド・カッシモさん(25)は、ジョゼ・フォルジャズ建築事務所チームの若手建築家で、砦の事前調査と修復事業での日々の監督作業に従事しました。

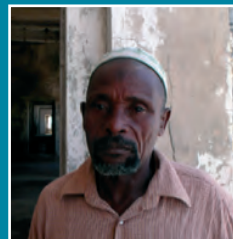
「私は、この島で生まれ育ち、物心ついたときからこのモザンビーク島の修復をするために建築家になりたいと思っていました。ですから、今日こうして修復事業の中で仕事をしているということは、私にとって本当に驚くようなことです。私が島と建築に対して抱いている情熱は、このプロジェクトによって一つになりました。本当に夢のような体験です。マプトでの建築の勉強を修了したあかつきには、更に海外で研鑽を積みたいと考えています。そして、いつの日か再びこの地に戻り、私の故郷であるモザンビーク島の建築遺産の保護に対して、私が得た技術をもって貢献したいと考えています。」

アマデ・ウッセンさん(60)は熟練した石工で、1997年から島の市議会に勤務しています。アマデさんは、今回のサン・セバ스티アン砦の修復事業に参加する以前に、島にあるカーサ・ジラソール(ひまわりの家)という邸宅の修復事業(2003-2008)にも参加しています。

「遺産保護の計り知れないメリットといえば、それは仕事を生み出すことだね。島には仕事が必要だし、我々は働く権利を持っている。私自身は、石工の技術と経験を生かしての仕事にとてもやり甲斐を感じたし、特に様々な専門家からアドバイスを得られたことがよかった。私は、過去に石灰と石による修復作業を数年間経験したことがあったけど、今回、修復を専門とする会社としてしっかり連携しながら仕事したおかげで、必要な時に我々の技術をうまく加減したり改善する機会が得られたよ。もし、島に対する望みを一つあげるとすれば、私はこの遺産とその周辺の人々のために安全な水を配水できるための仕組作りの仕事を創り出すよ。島のすべての貯水槽は、人々にきれいな上水を供給するために修復が必要だ。まさに、仕事の創出と安全な上水の整備が、島を明るく未来へと導く鍵だろう。」

アブダラ・カッシモさん(46)も、モザンビークとポルトガルの修復協議会であるテイシェイラ・ドゥアルテ/ベルのもとで作業に加わった熟練の石工です。彼は1978年から公共事業や島の博物館での仕事に携わり、1997年からは市議会付きで仕事をしています。

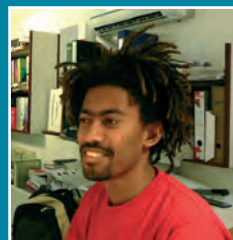
「私たちは、島に対して大きな誇りを持っています。ですから、この砦を廃墟のようにさせてはいけなくと思っています。私たちは昔からこの島を美しくしたいと思っていましたし、そのために遺産を修復し、保存維持していきたいと常々思ってきました。現在の私に与えられた役割の中では、必ずしも、自分が身につけてきた専門的な技術を発揮できるわけではありませんし、やはり実際は自分が得意な分野で作業をするのが一番楽しいです。それでも、今回の修復作業では、私は単なる石工としての役割以上の責任を担うことになり、木材の選定と、木製の梁が後続の作業に影響のないよう正しく設置されていることを確認する役割を任せられました。実は、私たちもこれまで長年にわたって得てきた経験やラム、ザンジバルでの特別なトレーニングで得た知識などがあったので、専門家から提案された修復手法に対して、いつもすぐに納得できたわけではありません。それでも、この現場での体験に助けられ、チームの中で常に活発で建設的な意見交換ができたおかげで、私たちはそれぞれの問題に対して、いつも素早く適切な技術的解決方法を見出すことができました。技術者としての私は、今回の事業でも充実した実り多き経験を得られたと思います。私の夢は、このモザンビーク島の家々、路、庭園、貯水槽すべての修復が完成した姿をみることです。修復事業は雇用の創出にもつながりますし、結果的に私たちの生活を改善し、より多くの観光客を魅了することになるでしょう。」



アマデ・ウッセンさん



アブダラ・カッシモさん



モハンマッド・カッシモさん

年表

10世紀 :モザンビーク島に関する記述が、初めてアラビア語の書物に登場する。

10～15世紀 :アラブの交易拠点として栄える。

1498 :ポルトガル人のヴァスコ・ダ・ガマが島に上陸する。

1502 :ヴァスコ・ダ・ガマ、2回目の上陸。モザンビークにおけるポルトガル初の交易拠点が設置される。

1507-1508 :サン・ガブリエル砦が建設される。

1522 :ノサ・セニョラ・デ・バルアルテ礼拝堂が建設される。

1558-1620 :トルコ帝国の脅威から島を守るため、サン・セバスティアン要塞が建設される。

1607 :島はオランダ軍の攻撃をうけるも撃退する。

1750-1840 :奴隷貿易が行われた時代。

1762 :島はゴア総督の管理下を離れることになり、ポルトガル直轄の植民地となる。

1869 :スエズ運河が建設される。これにより、喜望峰やモザンビークを通過することなくインドとヨーロッパの間の往来が可能になる。

1898 :ポルトガル領モザンビークの首都がロレンツォ・マルケス(現マプト)に移転される。

1947 :島からやや北に位置するナカラに港が建設され、これが島の経済に壊滅的な打撃を与える。

1975 :6月25日、モザンビークがポルトガルから独立する。

1991 :モザンビーク島がユネスコの世界遺産リストに登録される。

2008 :サン・セバスティアン砦の修復事業が開始される。

参照 :ユネスコ・クーリエ(1997)より抜粋



修復前のサン・セバスティアン砦

謝辞

ユネスコは、本書の刊行を実現するための資金の支援を行ってくださった日本政府に深い感謝の気持ちを込めて、ここに記します。

また、私たち編集担当は、この修復事業を成功に導くために不可欠な専門的技術を提供して下さったフランシスコ・モンテイロ、事業の技術的な事前調査と統括を引き受けて下さったジョゼ・フォルジャズ建築事務所の皆さん、そして事業の施工を担った修復協議会のテイシェイラ・ドゥアルテ／ベルの皆さんに心から感謝申し上げます。

更に、ユネスコ枠外予算調達協力部部長の荒田明夫と世界遺産センター副所長のキショー・ラオ両氏の惜しみないサポートを心より感謝しています。また、バーバラ・ブランシャール、イザベル・ドゥ・ビーエ、ジーナ・ダブルデイ、堀内ラジャイ千保、レイラ・マズィズ、サルヴァトーレ・ミネオ、岡橋純子、パトリシア・サフィ、エブリマ・サール、ナナ・ティアム、ヴェスナ・ヴィチッチ＝ルガシー、そしてエリザベス・ワンガリの各氏にも感謝申し上げます。

本書に記載された内容は各執筆者個人のものであり、その考えや主張は、必ずしもユネスコの考えを反映したり、承認を得たりしたものではありません。

また、ここに記載された図版や記述に示されている国、地域、都市、あるいはその管理機関が主張している境界線の法的状況について、ユネスコの見解は一切含まれていません。

発行： 国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)
7, place de Fontenoy, 75352 Paris 07 SP,
France
発行年： 2009年

ISBN 978-92-3-104140-2
© UNESCO

本書の著作権は、特別に記したものをのぞき、すべてユネスコにあります。
無断での複写・転載を禁じます。

編集担当

ラザール・エルンドゥ・アソモ、ヤナ・ヴァイド
(世界遺産センター)

英文翻訳

小関久乃

編集

キャロライン・ローレンス

図版選定およびデザイン

ジョゼ・フォルジャズ建築事務所、モザンビーク

写真提供/著作権

ジョゼ・フォルジャズ建築事務所
ポルトガル国立図書館
ポルトガル図書・図書館総局
ユネスコ

再生事業 支援パートナー

モザンビーク政府
日本国政府
ポルトガル語諸国共同体(UCCLA)
ポルトガル援助開発機構(IPAD)
ベルギー・フランドル政府
オランダ政府

刊行資金協力

ユネスコ文化遺産保存日本信託基金





